# 第１回　魅力ある府立高校づくり懇話会　（概要）

**１　日　　時**

令和４年11月10日（木）午前９時～11時

**２　場　　所**

京都産業大学むすびわざ館　３－Ａ

**３　出 席 者**

〇委　　員　11名（欠席１名）

〇教育委員会　前川教育長、村山教育監、大路管理部長、吉村指導部長、村田指導部理事、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、片又高校改革推進室参事

**４　概　　要**

〇教育長あいさつ

〇委員紹介

〇座長選出

〇事務局からの説明

〇意見交換

---

**■教育長あいさつ**

京都府教育委員会では、新しい時代の魅力ある府立高校づくりを、中長期的な展望を持って進めていくため、本年３月に「府立高校の在り方ビジョン」を策定した。

少子化、時代・社会の変化、保護者像の変化、また中学生が高校に求めるものの変化など、府立高校を取り巻く様々なものが、以前と比べて大きく変わってきている。そのような中で、府立高校が公教育という視点を持って、どのような役割を果たしていくべきかということを、改めて検討すべき時期に来ている。

京都府は南北に長い地形であり、地域事情もそれぞれ異なるので、一律に考えることはできない。地域の事情、子どもたちのニーズをふまえ、これからの少子化の中で、どうすれば府立高校として子どもたちに素晴らしい教育を提供できるのかということを、皆様の意見をいただいて、しっかりと考えていきたい。

学校・課程・学科の在り方や役割、各地域における学校の望ましい姿、必要な環境整備といったことについて、意見をいただきたいと思っている。この懇話会でいただいた意見をもとに、来年度中には全体の方向性を示す基本計画を策定して、その後、具体の検討に入っていきたいと考えている。限られた日程ではあるが、忌憚のない御意見を賜り、この会議が実り多いものとなるようお願い申し上げる。

**■委員紹介**

**■座長選出**

懇話会設置要綱の第４条に基づき、原委員を座長に選出した。

**■事務局からの説明**

**■意見交換（主な意見）**

**◆：座長　　○：委員　　□：教育委員会**

◆「魅力のある府立高校をつくるにはどうすればいいか」という点について、それぞれの立場から意見をいただきたい。

○府立高校は、公教育に課された使命を背負っている。これまで、府内各地域で各校が、それぞれ特色化・魅力化を図りながら、教育活動を進めてきたと思っている。また、10 年近く前に選抜制度が変わり、中学生が学びたい学校で学び、その資質を伸ばせるよう、より選択肢が多くなっている。今年度の１年生から新学習指導要領が実施、加えて１人１台端末の導入となり、新しい科目や新しい学びのスタイルへの対応が求められている。中学生の人数が減っている状況、それに合わせて定員が未充足の府立高校が増えているという状況があり、今後さらなる特色化・魅力化をどのように進めていくかが課題である。

○「地域に根ざした学校」というのが府立高校の魅力だと思う。地元の中学生に愛され、来てもらえるような学校づくりに加え、この学びはこの学校でしかできないというものがあって、地域を越えて選べるような仕組みも合わせながら、各学校の定員が充足する魅力化が進められないか。

○生徒数・クラス数が減り、授業や学校行事の活気が失われていくことは、学校現場としては非常に大きな問題である。生徒たちが学校行事を盛り上げたときに得られる教育効果は、非常に大きい。

○生徒たちがやりたいことができる学校が、魅力ある学校だと考えている。とことん学びたい、行事を頑張ってやりたい、部活動を頑張ってやりたいなど、様々な希望がある。学校の雰囲気も大事である。高校生対象のアンケートでは、校則の改善を求める声が多いようだ。生徒に対して学校が柔軟に対応することも必要ではないか。

○北部地域では少子化が特に進んでおり、府立高校は地域に５、６校しかない。また、私学への進学者もかなりおり、府立高校の規模がどんどん小さくなっている。部活動では、連合チームを作らないと公式戦に出場できないような状況である。

○新型コロナの影響もあり、経済的に厳しい家庭が増えてきている。そのような中、修学旅行の日数を減らす学校がある。経済面でのケアが必要ではないか。北部では、１つの学校に多様な生徒が在籍している。多様な生徒が輝ける魅力ある学校づくりが必要だと考えている。

○中学校ではこれまでから、行ける学校を選ぶのではなく、行きたい学校、高校での３年間を見通して、３年間充実した生活ができる学校を選ぶようにという進路指導を行ってきている。それは以前も今も変わりはないが、近年は学習塾の指導が非常に強く影響し、中学校側の思う進路指導とはいかないケースもある。

○中学生の高校選択の視点が、この 10 年ぐらいで大きく様変わりをしたと思う。以前は、１番目の要素として、地元志向や部活動が挙がっていた。最近は、１番に挙がってくる要素は、「高校卒業後の進路実績」である。北部から南部まですべて同じとは言い切れないが、多様な場所へ通学が可能な地域の子たちは、学力の高い子ほど、卒業後の進路実績ということを１番に挙げている。もう１つは、府立高校生対象のアンケートにもあったが、「合格できそうなところはどこか」という視点であり、それらを考慮した上で、２番目、３番目に、「通学のしやすさ」、「地域性」、もしくは「部活動」が入ってくる。中学生にとっては、新型コロナによって部活動が思いっきりできなくなり、よりそうした傾向が強まったのではないか。

○近年中学生の進路選択が大きく様変わりしたと感じる。中学生が一番大切にしていることは、自分自身の目で見るという部分である。合同説明会や各校の学校公開など、いろいろと見に行っている。そういう場が以前よりも早い時期に設定されている。一昔前は、別に見に行かなくても地元の学校に行くからよいという感じであったが、今は自分の目でしっかり見て、体験して、３年間通えそうだなとか、自分のやりたいことが見つけられそうだなといった部分を中心に、子どもたちが志望校を考えている。保護者や子どもたちが実際に行って、体験して、見るという部分が一番大事だと感じている。

○中学生は高校の先輩から、様々な情報を得ている。部活動の人間関係など、いろいろな繋がりの中で情報を得て、それをもとに考えている部分は大きいと思う。また、高校側から中学校に来てもらい、子どもたちに直接説明をしてもらう機会もある。いろいろな情報を得て、それをもとに進路選択をしていくという点については、昔以上に大事にしていると思う。

◆中学生が一番欲しがっている高校の情報とは何か。中学生は高校のどういうところを見ているのか。

○その高校の生徒の頑張っている姿や、楽しそうな雰囲気が一番大事だと思う。実際に見に行っ

た中学生が「高校生がものすごく一生懸命やっていた」という感想を持つ学校は、やはり魅力ある学校だと感じる。今現在高校生活を送っている高校生が、どれだけ熱をもって一生懸命やっているかという部分が、中学生には大きな影響を与えると思っている。

○高校側と中学校側で、見えている風景に若干違いがあるような気がした。京都府は広いので、高校選択に塾の指導が効いているかどうかは、地域によって異なると思う。ただ、進路実績はシビアに見られている。高校側と中学校側の両方に通じるのは、学校の活気の部分である。中学生からすると、先輩たちが輝いている姿が見られるか、学校として活気があるかといったところは、大きな要因になってくるのだと思う。

○学校の魅力化においては、部活動のみで勝負するという感じではなくなってきていると思う。部活動は私学の特色のようになってしまっているところもある。このところの政策では、部活動を様々な形で学校の外へ移行していくという方向性である。高校も中学校も、部活動頼みで学校に子どもたちを引き付けておくという戦略はとれないとなったときに、どの要素で活気を出すのか。学校行事もおそらく限界がくる。改めて教科や総合的な探究の時間等における学びの意味を見直し、活気をどこで出していくのかということが焦点になってくると思う。

○「府立高校の在り方ビジョン」には、ＳＴＥＡＭ教育などいろいろと示されているが、ここまで京都府が政策として進めてきたことについての、成果や課題はどうか。そしてどのようなビジョンを描こうとしているのかという、京都府教育委員会の素案が必要だと思う。そこから作っていくということなのかもしれないが、教育委員会の主体性や姿勢が大事ではないか。

○「選択肢を多くする」という意味についてであるが、その場合の選択肢の中身がずいぶん変わってきていると思う。近年通信制が拡大してきているように、今からの高校教育全体の変革としては、間違いなく修得主義の方に進んでいく。全体が単位制に近いような形にシフトしていくだろう。「一人一人」や「多様性」といったキーワードにも関係するが、これからもし選択肢を増やすとすればどのような選択肢を増やしていけばいいのかということを、今回のアンケート調査結果などをもとに考えていければと思う。それだけでなく、高校全体として、府立高校のボリュームゾーンの子どもたちの学びや学校生活をどう充実させていくのかというところも、ともに考えていく必要がある。

◆「府立高校の在り方ビジョン」は検討会議で議論されてできあがったものだが、「ビジョン作成にあたって議論されたことで、重要なことは何なのか」、「その議論でどういう方向性が確認されていたのか」を、委員としては理解したいので、事務局から説明をいただきたい。

□このビジョンについては、昨年１年間の検討会議等での議論を踏まえて、令和４年３月に策定

をしたところである。今後、令和４年度から概ね10年間を見越して、どのような方向性で教育を進めていくかということを策定させていただいた。ビジョン冊子の12ページから16ページで、基本的な考え方を示している。また、令和３年に策定した「第２期京都府教育振興プラン」を前提として、このビジョンを策定している。
府立高校の果たすべき役割として「公教育の場として教育の機会を保障するとともに選択肢の多様性を確保する」ということに加え、「すべての生徒が夢や希望を持ち、未来に向かっていきいきと学ぶことができる高校」を目指すことを位置づけている。
その上で、高校教育の展開において重点とするべき項目を挙げ、私学との協調や魅力を高める視点などをお示しし、具体的に取り組もうとしている「目指す方向性」についても記載している。
教育内容として取り組むことと並行して、制度面も見直していく必要があると考え、魅力ある高校づくりにおいては、内容面と制度を改革の２本柱にさせていただいているところである。
ビジョン冊子の最後には概要版を掲載している。ここで示しているような方向性を、教育委員会としては検討していくと理解いただければと思う。

◆直近の「府立高校の在り方ビジョン検討会議」の中で議論され、柱としている、また提案されていることを項目出ししてもらって、それらについてしっかりと議論していくとよいのではないか。

○部活動や行事には限界があるのではないかという意見があったが、昨年度のビジョンの検討会議では、今の高校生にとっては、部活動や行事は大切な魅力のひとつだという意見もあった。
また、スクール・ポリシーに関わって、どのような入学者を受け入れていくか、授業の魅力がやはり大切であり、カリキュラムをどうしていくか、卒業後の社会で生かせる資質能力をどうやって身につけさせていくのかといった議論があった。高校段階の入口と中身と出口のそれぞれの魅力を、どう各府立高校が出していくか、どのように広報をしていくかという議論もあった。多様な生徒がいて多様なニーズがあることや、現在の定時制課程の状況などについての議論もあった。

○北部は、子どもの数は少ないが、学校を減らすと通学に大変な時間がかかるようになってしまうおそれがある。部活動をがんばりたい生徒にとっては、朝練習のために何時に起きて何時に家を出ないといけないかということも、高校選びの大事な要素になると思う。アンケート結果でも、高校選択の理由において「自宅から近いから・通いやすいから」が上位であり、学校でどれだけ時間を過ごせるかというところを担保したいのだと感じた。一方、帰りに寄り道ができる電車通学を希望する生徒もいる。アンケート結果をはじめ、様々な希望があることを踏まえて、総合的に府立高校の在り方を考えていかなければならない。

○中学生や保護者は、いろいろな高校の様子を実際に見に行くとよい。子どものニーズに合っているか、カリキュラムや校則はどうかということに加えて、学校の雰囲気を知ることが大切である。部活動での先輩の雰囲気も大事である。教員自身が魅力的かどうかということも、授業の魅力に繋がると思う。

○今、小学校・中学校では、コミュニティ・スクールの取組が充実してきている。そこに高校側も入っていって、中高連携や地域連携を強めていければ、府立高校の魅力化が図れるのではないか。そして、地域に根ざして地域に愛され、教育活動を進めていけるようになるのではないか。

◆保護者として魅力を感じる高校の良さとは、どのような点か。

○保護者としては毎朝早くから弁当を準備しており、学食があるとよいと考える。また、学用品が買える購買部もあるとありがたい。先日、甲子園で優勝した高校の監督が「青春は密ですから」と言っておられたが、親としては高校で様々なことを経験してほしい。高校段階では、自分づくりに加えて「For You 精神」を大切にして、社会への働きかけや、自分が社会でどう役に立つのかということに重きを置いて行う探究学習、地域連携にも取り組んでほしい。

○大学２年生と高校３年生の保護者であるが、子どもは２人とも同じ府立高校を選んだ。高校選択の決め手については、上の子は自分の意思で決めたのだが、学校見学に行って、迎えてもらうときからとても楽しそうだったというのが第一声だった。入りたい部活動があったというのも決め手の１つだったが、子どもが感じる「楽しそう」というのがすべてかなと思う。下の子も、その高校に通っている兄が楽しそうだったので、何も迷うことなく同じ高校を選んだ。

○高校選択における保護者の視点としては、友人などに聞くと、特に女子生徒の保護者はトイレがきれいかといったところもチェックしている方が多い。府立高校では、全部洋式でないところもあると思うので、どこの学校もきれいにしてもらえるとありがたい。また、高校卒業後の進学先を気にされる方も多い。府立高校には個人ロッカーがなく、生徒が大変重たい荷物を持ち歩いている。保護者の希望としては、そうしたスペースを確保してもらえればいいなとも思う。

○高校生が素朴に「楽しそう」という点に学校の魅力を感じていることは理解できるが、どういうときの楽しさなのかといった点で詰めが必要ではないか。現状の「楽しそう」から、違う形での「楽しそう」を考えることもできると思う。

○魅力ある学校を目指すには、部活動頼みは、やはり難しくなってきていると思う。行事につい

ても、学校生活を充実させていく上で節目をつくるという点や、校風をつくる上でも重要ではあるが、それ１本では難しいだろう。日々の学校生活のほとんどは授業である。だから、学習指導の視点は重要であるし、探究活動というのは本当に教科と行事の中間的な要素で、さらに行事以上にダイナミックに地域を巻き込める可能性を持っていたりもする。そういったところで、卒業後のキャリアも見据えて、地域をどのように巻き込んでいくのかということが、非常に大事である。

○大学入試改革全体の傾向からすると、キャリアや出口を見据えた入口としての入試に確実にシフトしてきている。仕事への接続を考えたときに「レディネス」という概念が大切になる。高大の接続でいうと、大学に入ってそこでアカデミックに学んでいく上での準備性があるか。あるいは大学卒業後の仕事に入るときの準備性があるかどうか。これまでであれば大学の出口のところで問うていたものを、入口のところで問い始めているのが、このところの高大接続の考え方だと思う。実際問題として、学歴・学校歴みたいなものと、その後のキャリアが不整合を起こし始めているという状況がある。それが、「資質・能力ベース」や「コンピテンシーベース」などと言われていることの根っこにあるのだと思う。スクール・ミッションや、広い意味での進路実現を考えるには、学校の中でしっかりと「アカデミックなレディネス」や「キャリアのレディネス」に繋がるような学びや活動が展開できるかどうかが大事になってくる。

○公立高校として「地域」を持っているということは、非常に大きなプラス要因になるかもしれない。学校というのは地域にとって最後の砦みたいなところもある。人材バンクや、地域の応援団みたいなものをうまくつくって、探究的な学びを進めることが考えられる。また、高校生は地域の貴重なリソースなので、地域の活性化に繋げていく、高校生が参画しながら学んでいくといったことが、地域を持っていることで実現できる。そういうメリットを最大限に生かすべきだろう。

○学校規模が小さくなってくると教員が減り、専門の教員がすべての教科に配置できないという状況も出てくる。そうしたことへの対応として、オンラインなどの活用も考えていかないといけない。１人１台端末に、様々な子どもたちの学びを保障していく、あるいは活性化していくためのヒント、ポテンシャルがあるのではないか。

◆これまで、高校から大学への接続というと、テストペーパーに提示される学力の指標１本で勝負してきた部分があるが、これからは大学で学ぶ準備が高等学校でしっかりできているかを問う時代に転換していく。そういう点での魅力づくりというところでは、教科内容や方法も含めて、北部の地域にもハンディキャップがあるわけではない。

○二極化の現象が高校生の中にも起きている。高校卒業後に大学や専門学校に進学をして、それ

を生かして就職をするという考え方ができる人たちの方に焦点が当たりがちであると思う。一方で、その考え方に乗りきれなくて、どうしたらいいのか立ちすくんでいるような人たちを受け入れることは、私学ではなかなか難く、府立高校に求められている。特別支援学校と関わることもある。府立高校の中にも、通級による指導を取り入れて成果を挙げている学校がある。そのあたりにも魅力づくりのヒントがあると思う。

○小学校レベルの計算なども定着しないままに、とりあえず高校に入ってしまう人たちもいる。そういう人たちが安心して学べるような仕組みづくりが、府立高校ならできるのではないか。そのためには学年制の廃止なども考えられる。単位制である通信制高校が伸びている理由も、そうしたことにあるのではないか。全日制高校に入ったけれども辞めることになった生徒が次の進路として考えるのが、通信制である。しかし、通信制に行って、しっかり卒業ができる子は、そもそも自学ができる力のある子である。通信制へ進路変更してもまた挫折して、そのまま引きこもりになるというケースも増えていると思う。

○「学校は地域にとって最後の砦」という考え方に同感である。特に府立高校はそうだと思う。高校に入学してもなお、小学校等の学習内容の復習ができるような、学年制などにとらわれないようなシステムで学ぶことができれば、「どんな人が入ってきても、楽しいと思える学校生活」が実現できるのではないか。

◆高等学校を、例えば学力という１つの縦の軸で見て多様化させるという発想は、やめた方がいいのではないかと考えている。同じ学力帯、あるいは同じような状況にある人たちを、横に多様化させるべきである。同じような考え方をもった子たちだけをどうするのかではなくて、選択肢を様々に用意するという考え方が必要だと思う。

○高校は今年から新しい学習指導要領のもとでの学びが実施されているが、小・中学校については、既に新学習指導要領のもと、主体的・対話的で深い学びという本当にアクティブな学びを積極的に進めている。そうした授業が、子どもたちにとって魅力ある授業になってきていると思う。高校生のアンケート調査で、府立高校を選択した理由として「特色ある取組を行っているなど授業内容に興味があったから」を選んでいる子どもたちが、普通科には少なくて、専門学科や職業学科、総合学科に多いというところに、ポイントがあるのではないか。そうした学科の持っている魅力を再確認し、中学生に向けてアピールしていくべきである。

○大学の学びやその後の社会においての学びのための、レディネスとしての高校の在り方は、重要である。小・中学校での学びを繋いでいった先に、高校の学びがある。今、「府立高校の在り方ビジョン」で示されているような、新しい時代に応じた探究的な学びや学習スタイルの構築を、前面に出して勇気をもって進んでいただくことが、将来的な魅力にも繋がり、子どもた

ちにつけたい資質能力をつけていくことになると思う。その成果が、普通科、職業学科、普通科系専門学科のそれぞれにおいて、十二分に発揮されることを望んでいる。

○大学入試も今後の数年で大きく変わっていくだろう。これまでのような一般入試に対応できる力をつけさせながらも、新たな学びの中で育った資質能力をもった子どもたちが、多様な入試に対応して社会の中に出ていくということができるのが、一番望ましいと思う。

◆全日制普通科一括りではなく、職業学科やその他専門学科の持つ魅力を再発掘し、中学生に向けてアピールしていくべきである。

◆職業学科で学んだ生徒を対象とした大学入試を経た学生は、大学で伸びる傾向にある。しっかりとしたレディネスができあがっている。ポテンシャルをしっかり持っている子たちに光を当てていく時代が、これからまた来るのではないか。

○中学生は夢と希望を抱いて高校に入学していく。高校生活がうまくいって、生徒が「楽しい」と感じていることを知ると、中学校教員は非常に嬉しい気持ちになる。しかし、中学校でも不登校の生徒が非常に増えており、その不登校の背景に発達障害があるなど、苦労している子も多い。中学校で通級による指導を受けている生徒たちも、中学校を卒業して、どこかに所属できるということは、非常に大事である。高校に行ってうまくいけばよいが、高校教員が手厚く対応をしても、進路変更を余儀なくされる場合もあると思う。そうであっても、子どもたちが学びを止めない、ずっと学び続けられる、そういうシステムを組み込めたらと思っている。実際に考えるのは難しいが、今まで現場でこういうものだと思っていたのとは違う制度や内容を構築していくことで、子どもたちが学び続けられるのではないか。

○「誰１人取り残さない」というキーワードは、心に刺さる言葉である。どの子どもたちも、ずっと大事にしてもらっているということを感じつつ、自分の社会性が発揮されるように、コミュニケーション能力も含めて様々な資質や能力が培われていくようなシステム、ネットワークが必要である。制度面にも多様性を持たせ、いろいろなことができるようなものになればよいと思う。

◆大学生の姿から、中学校や高校での学びにこういうところが不足していると見えることはないか。

○「そうぞうりょく」がどれだけ培われているのかなと思う。他の人の痛みを知るような「想像力」と、クリエイティブな「創造力」。いろいろなことを想定して、他の人に関われたり、その中で新しいものを生み出したりする力であり、そういうことがなんとか培われないかと思っ

ている。それは探究的な学びと、非常に強い関係があると感じている。

◆京都の府立高校の魅力化において、〇〇高校に行ってよかった、〇〇高校で楽しかったというのは重要な高校生の気づきであるが、その「よかった」、「楽しかった」の背景に何があるのかということが大事である。高等学校の段階で、「はい」と手を挙げて、「私は、こう思います。根拠はこうです。」ということをしっかり言えるような、そして答えが１個ではない、場合によっては答えがないような問いに向かって、「自分はこう思う。論拠はこうだ。」というふうに言えるタイプの高校生を育てていくことが、魅力化であり、さらにはその方略が探究活動なのかもしれない。京都府立高校はそれぞれの学校が探究型の学習に力を入れている、という方向にもっていくのもよいかもしれない。

〇夜間定時制は、在籍者数が急激に減っている。四則演算やアルファベットに不安のある子もいるが、卒業に向けて一生懸命学んでおり、退学者は減ってきている。丁寧な学びのサポートが、府立高校ではできているのではないかと思う。ただ、在籍者数が減っていることで、部活動が成立しなかったり、合同の教育活動がなかなか実施できなかったりという状況については、課題である。

〇国のスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けている全日制の学校では、普通科・専門学科ともに、グループで週に２時間、自分たちでテーマを考えて解決していくというような探究的な学びを行っている。非常によい学びができており、普通科の中で探究的な学びができてないケースが多いのではないかという話もあったが、そういう学校ばかりでもないと思う。さらに、学校説明会などでは、そうした学びの内容を生徒の声で発信している。それが一番中学生や保護者にも届いている。ただ、うまくやれている学校ばかりではないので、地域の特性といったことも含めて、府立高校全体で考えていく必要があると感じた。

〇家から近いということが単純な魅力ではないというような意見もあるが、高校生にとっては地域との関係性は大切である。普通科の特色化において、地域との連携ということは、今後も非常に大事な要素になってくると思う。

〇魅力ある府立高校づくりということなので、高校の在り方のみに焦点がいきがちであるが、そういう魅力づくりに貢献できる生徒を、いかに中学校から送り出すかという視点も、大事なのだと思う。だから、中学校の時点でどういう力をつけて欲しいかということも、議論のテーブルにのることが望ましい。

〇不登校の問題は、中学校では非常に切実な問題になっている。国においても、特例校対応のような考え方もあるが、ボリュームゾーンでないと特例校は難しいと思う。不登校の問題は、生

徒数の規模や地域性による問題ではない。身近な高校にそうした子どもたちも入れる、例えば特例学級のような考え方もあるのではないか。高校卒業資格の在り方など、いろいろな問題はあるかと思うが、そういった仕組みができればよいとも思っている。

○特別支援学級に限らず、特別支援教育の視点は重要である。子どもの特性に合わせて、理解できるようにするとか、うまく繋がるようにするといったことが大切である。高校の先生にも、そうした視点が求められていて、研修もあるだろうが、府全体としての取組が必要である。担当になったからではなく、教員全体として素養を持ち合わせていることが必要である。教員研修の必要性や意識の改革といったことも、大事にしなくてはいけないと感じる。

○府立高校では、定時制などを中心に手厚く指導をしているが、定時制は志願者が減っており、成り立つかどうかという話だった。ＰＲがなされていないのではないか。必要なところに必要な支援の手が伸びていないということが、様々なところで起きていると感じている。定時制高校は、イメージがよくないのだと思う。特に京都は全日制普通科志向が強い。定時制に行っているということを、堂々と表明できないようなところがある。それを払拭するようなＰＲが必要である。定時制には、普通科にないような素敵な学びがあるということを、アピールすべきだと思う。

○普通科の中にあっても、特別支援教育の視点を持って、定時制と重なって存在するような仕組みが考えられないか。そこの壁をとっぱらって、全日制と定時制を自由に行き来できるようなシステムがあってもよいと思う。全国にないようなシステムの先駆けを、定時制を中心として考えていくのもよいと思った。

○現状の定時制は、自分が抱いていたイメージとはまったく違うものになっている。いろいろな理由で通っている生徒がいる。高校は、ホームページに力を入れているが、それは見ようとして見に行った人しか見られない。子どもたちは、先輩のＳＮＳなどで学校の様子を見て、楽しそうだとか、こんな勉強をしているのかということを知る。その情報で学校を選ぶということもあるので、見に行くホームページではなく、流れてくるＳＮＳを、もう少し取り込んだ方がよいのではないか。

○誰でも学べるのが公立高校の強みだと思う。一方で府としては、私学への支援も手厚くされている。府が手厚く支援をすることで、私学を志願する人が増えるのではないかと思った。

◆重要なのは、教育の環境をどう設定するかである。これは施設という意味ではなく、例えば一定の大きさとか、母数をしっかりと担保してあげないと、活力・活気がなくなっていってしまう。もちろん多様な学び、多様な進路チャンネルを用意することは重要だが、そのチャンネル

もあまり小さいと、コンパクトになり過ぎて、活力・活気が失われていってしまう。そのあたりのさじ加減の難しさがある。

◆定時制高校も教育的意義としては非常に重要だと思うが、社会的なニーズであったり、本来の役割であったりが変わってきている。通信制高校もそうである。積極的に通信制高校を選ぶ子たちがいる。高校生の多様性や高校生の変化も、しっかりと視野に入れて議論しないといけない。

◆府立高校はＰＲが下手である。生徒たちにとってよいことをやっていて、生徒たちも楽しく過ごしているのだろうが、それがなかなか周りの府民の皆さんや、中学生に伝わっていない部分があるのかもしれない。どうやって中学校に伝えるかという議論は、この先しないといけないと思っている。

○北部地域の夜間定時制はニーズが低くなっており、在籍者が少ない。しかし、少人数であるから居心地がよいといって来る生徒がいる。高齢の方もいれば、外国籍の方も在籍している。居場所があるということが大事だと思う。そういった意味で小規模もひとつではあるが、丹後地域の清新高校のような比較的大きな規模の学校をつくることで、行事や部活動が活性化するなど、いろいろな意味で活気のある、居場所がある高校にできると考えている。

○普通科の魅力化における、地域と連携した探究的な学びということでは、どのような取組を行うか、どこの学校も非常に苦労している。職業学科の方は、地域の企業や大学とのコラボの結果を、成果物として見せることができる。普通科の方は、目に見えるものにして外に出していくのがなかなか難しい面もある。

○ある研修大会で、コミュニティ・スクールの活用について話を聞いた。自分の学校は足腰の弱い子が多いのでマラソン大会を企画したところ、地域に住んでいるトップアスリートと縁ができて、地域連携が図られたというものだった。そこで感じたのは、魅力というのは必ずしも長所だけではないということ。どちらかというと弱みであり、少し不足している部分の、ここを改善したいということを、学校としてどう取り組むか考えることでもあると思う。自分の学校の弱みをさらけ出したところ、地域からの申し出があり、魅力化が始まったのだと感じた。

○新しいスクールガイドを見て、京都市立開建高等学校について知った。今、学校数が多すぎて減らさないといけないような状況の中で、新たな高校ができる背景や流れについて興味を持った。

○通級指導を受けている生徒たちにとっても、高校に向かえる選択肢を増やしていくということ

が、非常に大事だと思っている。以前に比べると選択肢はずいぶん増えたと思うが、昨今の新型コロナ禍にあっては、さらに選択肢が増えていけばよいと思う。

○中高間の連絡は大事である。７、８年前から、中学校の校長と高校の校長とが話をする場ができている。そこでの意見交換は、非常に有意義である。府立高校にしろ、市立高校にしろ、私立高校にしろ、どういう校長先生がどういう思いでどのような学校をつくっているか、どういうことを大事にしているかということを実際に聞いて、発信できることは、非常に大事だと思っている。

○中学校の校長が、地元地域の府立高校の学校運営協議会のメンバーとして参画している。地元の中学校長が、そういう場で意見を言う、話を聞くというのは、非常に良いことである。すべての地域での状況はわからないが、地域との繋がりを大事にしていくという部分は、大切だと思う。

○「一人一人を大切にする」、「誰一人取り残すことなく」という視点で、府立高校の在り方を考えていくのは、大きな柱の１つだと思う。一方で、圧倒的に多くの子どもたちが普通科に入学していくという事実もある。その普通科の特色化という視点も、大きな柱の１つとして考えていくべきだと思う。普通科は本当に「普通」で、色があまりついてない状況がある。スーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールといった特色のある高校の普通科や普通科系の専門学科はよいが、通常の普通科で中学生がどう選択するのかというときに、特色がなさすぎて、授業内容で選ぶのではなくて、自宅からの近さや部活動といった選択肢で選ぶしかないという側面もある。やはり普通科の特色化は、可能な範囲の中で進めていくべきである。教科横断的な学習内容を課題解決的にやっていくＳＴＥＡＭ教育であったり、グローバル人材の育成といった、英語を基盤とした学びを進めたりというような特色を、クラスとして持たせるなど、普通科の特色化を考えていく必要があると思う。

◆今日いただいた様々な意見を踏まえて、次回以降の議論を深めていきたい。
私からも付け加えるとすれば、学校間の連携をこれからどういうふうに深めていくのか。オンラインを利活用した学習保障についての御意見もあった。コミュニティ・スクールの話も出たが、学校間をどのように連携させながら、地域の特色を生かして、地域に愛される学校をつくっていくかという視点は重要である。
一方で、京都はやはり大学進学実績が非常に高い地域であるということは外せない。探究型の学力に大学側も寄っていくが、テスト学力を置き去りにしていいということではない。一般的に進学校と言われるような、進路保障をしっかりとできる学校に対する目配りも必要になっていくだろう。
そのあたりも含めて、これが京都府立高校の特色化であるという流れを、我々はしっかりと議

論していかなければならないと思う。生徒の多様性に配慮しながら、一方で、例えば学力に長けた部分がある子たちの進路も保障する。その両方をしっかり睨んだ議論をしていかないといけない。それがいろいろなタイプの高校生にとっての魅力になるのではないか。